



ユリウス暦以前の古代ローマ暦では3月が1年の始まりとされたことがあったそうです。日本の旧暦では1～3月が春とされ、年賀状にも「初春のお慶びを……」と書いたりします。我が国では3月は年度の最終月なので、何となくあわただしいこともあります。風の匂いや木々の梢、地域の催し物にも春の訪れを感じさせるものがあるようです。

連綿と受け継がれるオビシヤ

関東南東部に多い「オビシヤ」と呼ばれる農村の行事は、近世以降の越谷市域では何カ所も行われています。その催され方や記録の様子からは、当時の世相や自然の様子、それについての人々の想いがうかがわれます。

「オビシヤ」って何？

オビシヤは「御歩射」や「御奉射」などと言われたものが訛ったものだそうです。農村部だった地域の神社で古来催されている行事です。元々の漢字表記から弓矢による「的射」が知られていますが、これを伴わない、あるいは消滅した催し方もあるようです。また甘酒や謡うたいを伴うものもあるようです。

的射の場合、鳥居に吊るされた的に向かって社殿前から射ます。的は吉祥を表す鶴亀である所と八咫鳥やたがらす、あるいは鬼の所もあります。

いつ？ 何を祈る？

埼玉県のオビシヤを分析したものによると、1～3月に実施される例が全体の四分之三です。特に旧正月の2月が多いです。これは春・一年の始まりにあたって豊作や地域の安寧を祈念したことに関わるものではないでしょうか。10月に行う地域もあります。これは神様に収穫を感謝しそれを祝う意味があるのでしょう。(参考文献:「オビシヤ文書の世界」(岩田書院)、「埼玉のオビシヤ行事」(埼玉県教育委員会))



的射用の
弓、矢、的
(下間久里)

永く書き継がれてきた「年代記」

的射や甘酒、謡などと共に、多くの地域では「産社祭礼記」というような村の記録を当番で回して代々受け継いでいきます。「産社」とは村の鎮守様のことです。越谷地区では17世紀中ごろから360年余りもその記録が受け継がれ、今も毎年書き加えられています。(「越巻中新田の産社祭礼帳」こしまきなかしんでん おびしやさいれいちょう)として越谷市指定有形文化財に指定されています。) その一部をご紹介します。できるだけ当時の単語(表現)を用いながら、現代文の概要表記にしました。

- ◆寛保2年(1742): 8月2日、大出水があり、関東は残らず水かさが2mほどにもなった。田畑は皆損害を被り、年貢は無しとなった。
- ◆明和2年(1765): 4月、日光権現様(家康の事)150年忌のご法要があり、助郷、臨時助郷(道路整備その他の作業員)として村の石高百石につき作業員4人と馬2匹を出すように命じられた。
- ◆寛政3年(1791): 夏は大旱おおひでり。秋には大風雨で作物は水腐れになった。お代官様のお慈悲でお年貢は無しになった。伊奈家に騒動が起きた。
- ◆寛政4年(1792): 4月、伊奈家は断絶となった。春から夏まで旱ひでりで、末田用水の水が届かなくなったので、綾瀬川の堰せきから村人が協力し合って水を運んだ。そうしてこの年、豊作となった。
- ◆嘉永6年(1853): 6月、異国船来航で(ペリー来航)、海岸防備の諸大名様が多数ご通行のお触れが出された。

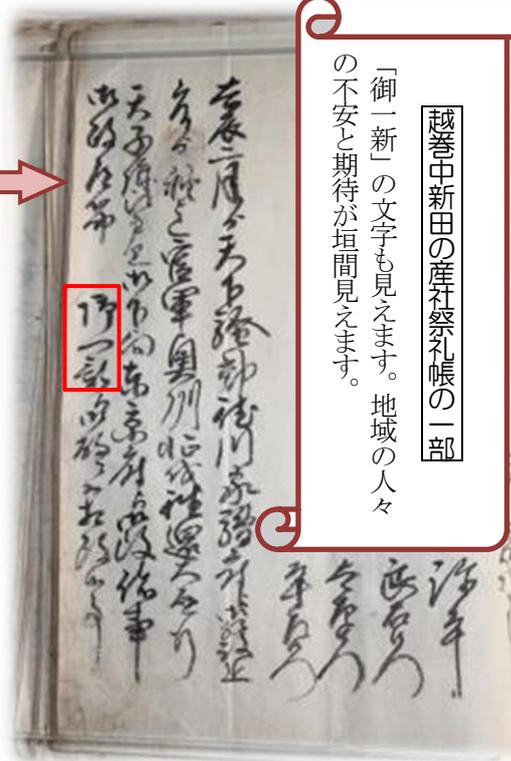
*伊奈氏は関東郡代として現川口市に赤山陣屋を構えていました。越ヶ谷と陣屋を結ぶ道は赤山街道と呼ばれました。

慶応4年
(1868)に
ついての記録

: 去辰年2月より天下騒動となり、徳川本家は駿府に移された。夏から秋まで官軍が奥州征伐(戊辰戦争)のために街道を大通行し、天子様は江戸に移られて東京府と改められた。

「御一新」の文字も見えます。地域の人々の不安と期待が垣間見えます。

越善中新田の産社祭礼帳の一部



このように天候や災害と共に、その年の政治向きや社会情勢も記録しています。近代(明治以降)になると世界の動きにも言及して、そのことと自分たちの生活との関連を図ろうとする部分もみえます。

以下に近現代の記録を原文のままご紹介します。(漢字は現代の字体)

- ◆大正8年(1919): 本年度ハ季候順調ナルヲ得テ米作麦作共ニ良好ナル成績ヲ揚ゲタリ。諸物価ハ世界大乱及ビ通過膨張トノ影響ヲ蒙リ、非常ナル勢ヲ以テ米価モ昂騰(中略) 昨年十二月頃ヨリ全世界ニ蔓延セリト聞ク流行風邪(スペイン風邪と言われたインフルエンザ...「古民家だより No.3」をご参照下さい)、赤々本村ヘモ流行セリ。
- ◆昭和22年(1947): 本年ハ敗戦第二年ノ年ヲ迎ヘテ我民族ニ採リテハ最モ困難ナル年ナリ。政治経済文化アラユル面ノ歩ミハ連合軍占領下ト云フ制限ノ枠内ニオカレ、(中略) 食糧の不足ハ夥シク、六月七月ノ端境期ニ於テハ大都市ノ一部ニハ相当ノ餓死者ヲ出セル状況ナリ。
- ◆昭和27年(1952): 2月11日。産土神の加護を受けま志て、昭和26年度も一同恙なくお目出度いお毘沙の日を迎える事が出来まして感謝いたします。敗戦六カ年、占領下に苦しんだ農村の人々も待望の講和条約の成立と共に、何か明るい感じが胸に迫って参ります。
- ◆昭和35年(1960): 2月26日。科学の進歩は、人類が夢に抱いてゐた月の表面を実写し、月の世界の神秘を明らかに月の世界への旅行も現実となって来た。(中略) 四年続きの豊作と稲作栽培技術の進歩、農薬の普及と相行って米実収高八千万石を突破するに至った事は、吾々農民の大きな誇りである。(中略) 皇室におかれては(中略) 関東武士の血を汲む平民正田家の娘美智子嬢との御婚約も整い、(中略) 皇太子殿下との御成婚の儀が国民盛喜のうちに目出度く挙行された(以下略)

この「産社祭礼記」は360年余りの長い間、地域の人々の願いや生き方、世の中の見方が、地に着いた視点で描かれた年代記と言えるでしょう。そしてこの営みは今も続いているのです。大切にしたい宝です。

春を告げる越ヶ谷段雛

「越ヶ谷」は江戸十軒店(日本橋)や鴻巣と並んで関東でも古くからの人形の産地です。今からおよそ230年余り前の安永年間に、越ヶ谷の会田佐右衛門という人が十軒店で修業をし、その技術を越ヶ谷で広めたのが始まりだそうです。(「日本雛祭考」昭和6年刊)

右の写真はこの人のご子孫のお宅に所蔵されているものです。今の並び方とは異なり、最上部の男雛と女雛は逆です。二段目は五人囃子で三段目は三人仕丁です。奢侈禁止令(豪華なものを禁止する法令)が出された享保年間(18世紀前半)の作品をモデルにした『越ヶ谷段雛』のレプリカです。素朴な造りですが、命が生き生き育つ春を迎えた喜びや子の健やかな成長を願う親の気持ちが表れています。

